探求の態度と安立の態度

（大正五年十月十四日京都哲學會秋期公開講演）

姉崎正治

Le sentiment religieux ne s'oppose donc pas au sentiment scientifique et philosophique; il le complète, ou plutôt il lui est au fond identique.....La science dit aux êtres: penetrez-vous les uns les autres; la religion dit aux êtres: unissez-vous les uns aux autres; ces deux préceptes ne font qu'un.

「.....Guyau, L'Irreligion de l'avinir, pp. 169-70.

此に出したのは、古い問題である、而して之に新な解釋を加へやうといふのでもなく、まして之に解決を與へやうとするのでは更にない。何れの問題でも、全然決定的の解決を告げるものでなく、一つ解釋が出て、問題が一段を進め、又は新方面を開展すれば、それから先に又他方向又は方面に進む。それ故此に試るのは、此の如き意味で、古い一問題を更に提出し、何か見方を求めて見たい、云はゞ問題の再提出 re-statement である。

人の心には隨分多くの矛盾や衝突を含むで居る。所謂良心と私慾との矛盾などいふ事は問はずとして、一體に知力と感情との衝突と稱する者には種々の方面があり、又重大の意味もあるが、近代の思想で特に問題となつたのは、實に科學と宗教との衝突といふ事であつた。此の問題は、勿論、何れの時代何れの國にも多少は存在して居たのであるが、十九世紀の後半程、此が熱した問題になつた事は他になからう。その時の科學對宗教問題は、主として生物學上の進化說が勢を得、その結果がキリスト教の世界觀、特に世界創造說と矛盾した爲に起つたものであつて、本當に云はゞ、十九世紀の生物學的世界觀とユダヤ傳來の神話的世界觀とが衝突し戰つたのである。その餘波は種々の方面に及んで、今日尙ほ色々の問題を思想界、宗教界に及ぼしつゝあるが、或る學說と他の或る時代の世界觀との衝突として見れば、此の問題は大體に於て解釋を得、而して進化說を基礎として、又は此と兩立してキリスト教の信仰を維持し、又は主張する人もある位である。然しながら、この特別な問題をたどうつて、人間精神の天性に具はつて居る矛盾に立ち入つて見ると、尙ほ一層重大で根本的の問題にぶつつかる。

その問題を概括して云へば、探求研究の態度と安心信仰と態度との相違といふ事

になる。研究の態度は主として科學となつて現はれ、信仰の態度は特に宗教に著く現はれて、一見兩極の觀がある。分別して云へば、研究といふのは、研究すべき事柄を我れ以外に眺めて、その現實相を觀察し分析し、而してその根據を求め、因果聯絡を明にするにあつて、その執る路は、大體で分析であり、理智を本にして進む。之に反して信仰といふのは、外界の事柄或は人物、又は靈界の消息にしても、それを自分の心情に結び付け、或は自分の心にそれを收め、內外融合の狀態に自己の滿足を發見し、而して大體之を究竟安立の地とするにある。尙ほ別の言葉で云はゞ、研究は、自分が外に向ふ態度であり、從つて進み進むで尙ほ先きへ先きへとたどり探るが、信仰は自分自らの中に小宇宙を打ち立て、そこに究竟の安立、不動の stabylite を作り出すのを目的とする。探求の心は、常に新方面を求めて、一歩一歩新な事實や消息を發見する探檢の心であつて、落ち着く先を定めないのを本性とする。之に反して信仰は、如何なる基礎に立ち如何なる種類になるにしても、始からして自分の中に安定した天地を作り出さうとするにあり、目的が定まり、又多くの場合には始から見込をつけ、又その目的の方に行き着き得る樣に心を指し向ける。

此の如くに對照して見れば、此二つの態度は、方向を異にし、手段を異にし、又それに

用ひる力を異にして、殆ど全然正反對の觀がある。而して事實、此の反對は種々の方面にその結果を現はし、某の時代の科學々說と一宗敎の宗義とが相反して戰つた事もあれば、或は同じく哲學者の間でもプラトーとアリストートルとの對照にもなり、或は一人の心の中で理智と感情との衝突、又は現實に關する知識と靈界の理想との衝突となり、又或は宗敎の權威者が科學者に對する迫害となり(ガリレオの場合の如く)、又は科學の宗敎に對する進擊にもなつた。

人類の歷史でも、又社會生活でも、又一個人の生活でも、此の如き對立反對が存在するのは、確に不幸な事に違ひない。若し人間が、單に分析探求のみで他を顧る要なく、又は信仰安心のみで滿足し得るならば、難問はなくなつて都合よからうが、兎に角人間精神には、此の二つの傾向があつて、兩方ともどれだけかはその存在を主張し、要求を貫かうとして、隨分多くの場合に衝突もして來たのである。今後といへども此の二つが全然調和して之の衝突が消滅するとは思へない。又今後此の二つの大衝突が起つて、その一方が全然勝を占め、他の一方が人生の中に聲を潛め、力を失つて了ふ事があらうとは、どうしても考へられない。さすれば、此の二つの存在は、人間精神の天性に固着した不幸とのみ見るべきであらうか。その間に何か圓滿な關係といふ

事は考へられない事であらうか。

そこで、此の二つの相關がどうあるべきかとか、又はどうなるであらうといふ如き問題然も大切の問題ではあるが此の如き問題よりも、先づ第一に問ふべき事は、同じ人間精神に、どうして、又はどの樣な工合にして、此の二つの傾向態度が兼ね具はつて居るかといふ點にある。「どうして」といふ問ひは、又「何故に」、「何の必要、又は意味あつて」といふ事にもなるが、此の問題に幾分でも解釋を與へる爲には、先我々自らの生命がどの樣な工合に出來て居るかといふ事に當つて見なければならぬ。何となれば、如何なる態度又作用にしても、我々に生命があり、その生命(强い意味で)の維持發達の爲に生ずる事、又此の生命を解釋する必要から出て來る事であるから、その方面から觀察すれば、解釋の端を得るに違ひない。

一つ類例で云ふならば、植物には根と幹や葉がある。而して根は通常、重力に從つて下へ下へと、又光線に當らぬ暗い方に延びて根を張る。之に反して幹や枝、葉や花は、重力に反抗して上へ上へと進み、又光りを受ける方にのみ擴がる。方向は、明に反對であるが、此二つの傾向があつて、植物はその生命を維持し永續する。而して「花は根に歸り、眞味は土に止まつて、上へ上へと進んで花を開き果を結むだあげくは、その

果が復土に歸つて、土の中から新に成長を始める。

人間の身體にも亦同樣の事がある。感覺機關は常に外に向つて眼を張り、耳を欹てゝ、生命の養ひになる者に向ひ、又は危害に具へ、運動機關の四肢が之を助けて、外に向つての生命を維持し擴張する。然るに滋養機關は、外から取り入れたものを內に收め、同化する役目をして、色々の飲食をも同じ消化液の中で化合せしめて、一種の釀造作用をする。人間は、此の二方面の作用に敢て矛盾を感じはしないが、兎に角方向は大體に於て正反對であつて、而かも兩々相助けて生命を營みつゝあるのである。

そこで精神的生活に就いて見るに、その中心は我れといふ自覺にある。而して自覺の生命は自主の生活であつて、心の種々の作用は、此の自主の中心を作り上げる爲、若くは又この中心の發動として存在する。勿論、自覺の內容、我れの範圍や性質は、人と時とによつて必しも同一でなく、從つて同形式同性質の精神作用でもその內容を異にするが、而かも自覺を中心とし、而して我れといふ精神的生活を開發するといふ一事は、先づ一般に亙る眞理と見てよからう。此の如く我といふ自覺を中心として生活を營むが、我のみが精神生活の全體でなく、自覺にはその周圍があり、近くは感じや考への緣 fringe があり、その感じや考は又我以外の他の精神に交涉し、又外界天然

の事物とも聯絡する。此が卽ち我れの生活する舞臺である。

身體と外界とは、大體皮膚で境して居るが、我れと舞臺との境は、大體に於て感覺にある。物質界の事に接するに感覺が必要である事は云ふまでもなく、他人の精神と交渉するにも、その直接に觸れる點は感覺を通したである。然しながら、何れにしても感覺は畢竟窓の如きもので交通の仲介に過ぎず、精神は之を通して外界と交通し、此を舞臺として我れの生命を營むのみならず、又舞臺を自分の生活と適應せしめ、或は又自ら進んで此舞臺を變更し、又は創造する事もある。我れと舞臺との關係に於て、或は外に向つて知覺認識の手を延ばし、又は外から來る材料を己れに攝取同化して、自分の生命を豐富にする。然し我を中心とした自主の生活として、精神生活は外界をも他人をも、又世界をも人生をも、結局は己れに結び付け、己れにとつて何かの意味ある者としなければ、生命の本義を發揮する事は出來ない。勿論外界他人との交渉は缺くべからざる要素であるが、それは我れの生命を開發する材料としてであり、我れといふ中心を棄て、又自覺の內容を離れては、精神生活の意味を成さない。必しも哲學上觀念論又は唯心論の立場に立たずとも、生命といふ事の根本要件が自主性、自分の爲に又自分での生活である以上は、自意識は、自己の中心、又從つて自己が活き、

自己が見る世界の中心燒點となる。獨り受け目的に中心となるのみならず、自ら活動的に中心となり、他に感化を及ぼし、自分の理想で世界を變更しやうとすらする。

然らば、探求研究の態度で周圍の事物、眞理を探るにしても、此の自主性といふ中心を離れる事は出來ない。外界は勿論自分一人で造り出したものでなく、世界には世界の事物や變化があつて、我れと獨立に存在し運行する。――此處では哲學上實在論と觀念論との勝負を定めないで、常識でいふ外界の實在を認めて。――そこで我れは、その外界の消息を知らん事を求める。海月の觸手や昆蟲の觸角から進んで、嬰兒が手を延ばして物に觸れたり、盲目が杖で地面を探るにも、又顯微鏡を用ひて微を探り、望遠鏡で天體を觀察するのも、統計を集めて社會の趨勢を察し、人間を試驗して心理の實績をするのも、皆此の探りであつて、何れも外界に天然若くは人事の、所謂客觀的實在を求めるにある。科學といふのは、要するに觀察や實驗の方法を組織的に具へ、材料に基いて、因果關係をたどるにある。科學の研究は、客觀を相手とし、外界の實相を目的とするから、所謂個人的立場を離れ、主觀性又感情性の支配を受けずに、事實を求める所謂る純客觀性を必要とする。精神的科學と雖も、その研究は客觀性である。科學の研究法は、十九世紀の物質主義科學者の云ふた如きに、機械的たるを要

しないが、客觀性を缺く事は出來ず、而してその能力は主として理智にある。

理智は外界の消息を探り、材料を集めると共に、又論理組織を與へて之を整へる。それ故、研究といふ事は、單に外に向ふ丈でなく、內で理性の鑄冶を加へる事をも含み、特に大科學者の創見には、多くの場合に、探求蒐集に先づ先見透察 insight の明が有力であるが、それでもその目的は外界の眞相を求めるにある。而して外界は無盡藏であり、微の微から大の大に至るまで、先づどれだけ探つて盡きるといふ見込は附かないから、研究は、大洋の航海の如くに、今まで見えて居た水平線に達した時には、遙な水平線が現はれて來る。研究には時々の決論もあれば、その場合每の滿足もある、然しその結論を最終とせずその滿足を絕待としない。尙ほ一層材料を集めもすれば新見地をも求め、又疑ひもすれば誤も正して進む。研究の態度には、分析、實驗、比較など、種々安立の態度と異なる點はあるが、それ等を一々述べるまでもなく、其根本的特性は探つて止まない精神、常に探りつゝ進む態度にある。此點に於て信仰が或る究竟の安定を求め、又求め得たならばそれを最後の立場として之に安んじ、之を悅びとするのと、殆ど正反對になる。概括して云へば、研究の態度は生命の延長、擴張を代表し、特に自分自らを目的としないで、生命の舞臺、卽ち周圍の世界を目的とする。

弘く探求といへば、自分の利害を基にして外界の消息を知る事、動物の具へて居る諸の知覺機關の仕事も之に加はるが、特に研究として云へば、知識の爲に知識を求める事であつて、その知識は終には實用になるにしても、それ等の結果には、腐心せずに、事實の眞相を捕へやうとするにある。然しながら、前にも述べた如く、生命の自主性といふ事はどうしても脱し得られる事でなく、知識の爲め知識を追ふにしても、その知識は、やはり之を自分が精神生活に吸收し同化して、自覺生活の一部又は一面、又は一要素とするを要する。理性の働きは此處にあるので、外から得た材料を精神の胃腑に同化する消化液の如きものである。實益利害といふ事は全くなくとも、外界の眞相を捕捉して、理性に消化するといふ事に、生命の延長があり、自分の精神生活は、自分の内の感じや慾だけで動くより以上、更に生命舞臺である世界と交通し、照應し、契合する。此處に自分の自主性にとつて知識的研究の意義があり、科學が精神的生活の一たる所以が具はる。研究それ自らは純客觀性の事であるが、生命の一つの働きとしては、やはりその結果で精神的生活を豐富にするを歸着とする。

それ故に、知識研究は、一方外界の眞相を己れに攝受し、大宇宙を小宇宙に收めるが、それと同時に、又自分の精神を世界の舞臺に働かしめ、自分を大宇宙の中に遊ばしめ

る事になる。何となれば、世界の眞相を探つてその中に秩序を發見し、法則眞理の進行を見るといふ事は科學の根本條件であり又目的であるが、世界を混沌の舞臺とせず、秩序ある宇宙 Cosmos であると見るのは、要するに理性の言葉又條目、理性の terms で世界を解釋する事であり、その結果は自分の理性と同樣か、若くは理性と照應すべき秩序が世界にあるを發見して、小宇宙と大宇宙との契合を體驗するにある。例へば、幾何學の定理の如きも、定理にある樣な消息——直角三角形の二邊の平方の和は弦の平方に均しといふ如き——を、初は、特別の事柄で偶然に經驗し、それから澤山の經驗を集めて歸納し、而して後に其を說明又は證明する事が出來る樣になれば、說明が出來たといふ事は、卽ちこの特殊の經驗以外にも又或は以前にも存在して居た理性に契合する一致點を發見したといふ事である。但し理性は始めから充實して居たのではなく、此の歸納的斷案の結果を說明し得た事に依つて、自分自らの內容を豐富にするのみならず、又理性自らの作用をも明白確實にし、それだけ自らの性能を發揮し得た事になる。卽ち科學の研究は、精神生活を外界から結びつけるのみならずそれに依つて、自らの自主性を充實するのである。ケプレルが云つた、「天體の運行が秩序正しく行はれるも驚くべき事實であるが、その運動の法則を數學の公式に捕へ得

る理性の働きは、一層驚くべきである」。外界の消息と理性の秩序との契合は、此の驚くべき事實を我々に示してくれるのである。

此の點に於ては、人事の研究に於ても決して異なる事はない。又特殊な歴史上又は社會上の事實について研究する場合にも、その事について出來るだけの材料を集めるは勿論、又その材料に批評を施し、而して終にその因果關係を説明し得た場合には、一般に人情の發動、社會生活の事情、又は人生を支配する諸の勢力について、他の方面で探り得た結果と比較し、又之を自分自身の精神狀態や社會生存や、想像、推察、構造に照らして、此等を通じて、人の精神生活や社會生活に遍通した因果聯絡を發見したといふ事に歸する。此の場合には、前に數學について云つた如き演繹作用だけではないが、要するに、精神生活が、あちらとこちらと、表面は異なつても、內實の因果關係に於て相照應し結合し得る事實を發見したのであつて、理性の概括又は同化作用が、それだけ內容を充實したと共に、自らを應用すべき範圍を擴げ得て、自らの作用にそれだけ廣大な調和聯絡 coherence, consistency を加へ得たのである。從つてそれだけ人事活動の世界が自分の心に入り、自分の心が廣い世間の生活と相照應し得て、それだけ、自分の精神生活が擴張し、その內容が充實した事になる。

歴史その他人事活動の研究については、その結果が單に抽象概括でなく、具體事實の聯絡であり、卽ち一々特別の事件や事相の中に遍通の消息を發見するにある事、又人事に關する科學は、此頃一寸問題になつて居る如く(大したとは考へないが)、二度と同じ事が起るといふ材料でなくとも、それ等の違つた事件の間に理性の概括を容れるといふ事など、論ずべき事が隨分ある。然しそれは今の主題でないから、略して、大體に於て人事に對する研究は、如何に複雜な材料を扱ふにしても、又それが自分の感情や偏見と混じ易いといふ事はあるにしても、兎に角、人事といふ舞臺を材料にし、その眞相を明にすると共にその結果自己の理性を明確にし自覺を充實するに歸着するといふ事さへ明にすればよいのである。

總て生命は延長繼續で出來て居るから、外に向つて延びる事を要する。然し延長擴張は畢竟元に歸つて自己を充實しなければ、風船玉の運命に終る。然らば外に向ふのは手段であつて、歸着は自主性の充實にある。但し此の充實は、孤立で出來るものでなく、包容性と伴ひ、外界の材料に依つて自己を豐富にし、自分の生命に世界を攝するを要するから、外に向ふのも、單に手段一つの手段 a means でなく、必然避くべからざる手段 the means であるから、やはり目的とする所の生命の充實にとつては要素で

ある。その結果や內容の如何は別として、探求の態度が人生に重きをなすのは此の爲めであつて、全くその利用厚生の應用を離れても、科學が知識の爲の知識、眞理の爲に眞理の研究として人心を支配するのは、要するに、人間の精神がその生活の舞臺を己れの心に取り收めやうとする必然不可抗の要求があるからである。且つ又利用厚生の道にしても、始めから技術應用を目的とした研究に大創見大發見のあつたためしはなく、眞理の發見、人の思想と生活とを支配する力ある研究は、眞に純客觀性を目的とする研究にあつたのである。必要は發明を生むといふが、それは小技術の事であつて、知識慾の抑へ難い發動にして始めて眞に新眞理の發見を遂げ得るのである。而してその結果利用の道を生む事は別として、人間の精神生活はそれだけ豐富になり、又それだけ人間の宇宙に於ける意義も明確になるのである。

曾て「佛教の實相觀」で說明した如く、人は世界を知る事に依つて自らを知り、自らを明らめる事に依つて宇宙の眞相をつきとめ、而して自然に運行する眞理は、之を捕へ、之を明らめる人格ある事に依つて、生きた意味のある眞理となつて來る。「法」は「人」に依つて又「人」を通じて理性の活きた「法」となる。此の如く觀察して來れば、探求の態度に於て外に向つた研究は、終局は、その中心燒點たり發源たる理性に歸つて、人生の意

義に加はる。花は日光に向ひ空中にはでやかに咲くが、それから結んだ果實は土に歸つて又更に根を張り、幹を成長する。

そこで轉じて再び安立の態度を觀、その結果たる信仰の意義を考へて見やう。安立の態度は、自分の內に滿足の天地を發見し建設しやうとする。輕い程度で云へば、身體が健康で、生活の內外に何等の動搖もない平安調和の狀態にある時の感じの如きも、その一であり、或は精神が、或る一時、萬事の解決を終つて――それがどれだけ續くやは暫く問はず――自己の自主生活以外何等の求むる所もなく、興奮的でなくして喜樂の狀態で、只管滿足平和の感じに充ちた時の如きも、安立の狀態である。優々自適、法悅、ecstasy、三昧地、無量心などいふのは、或る精神修養に依つて得た此の感じを表はした言葉であつて、その經驗を言葉で記述し難く、若し强いて之を表はさうとすれば譬喩を用ひる外ない。佛敎で入定の經驗を說くに譬喩形容の多い事や、キリスト敎の rapture が音樂的の諸調ある祈りや讃美歌となるのは、此の爲である。日本の禪味の閑寂、卽ち自己滿足乃至自己超越を表はすに、或は詩、或は發句、乃至音樂では內にこもつた音色の尺八を用ひるのも、此にある。

此の狀態を稱して純粹感情とも稱し得、無我の享樂とか、純主觀の天地、inwardness,

Innewerden 種々云つて言葉は盡きない。美術の爲の美術といふ主張や、宗教は純感情だといふ如き觀察は、皆此の安立を捕へて、之に恍惚とするから出て來る事である。之を他の方面から云はゞ、精神生命の自主性が自分だけで絶對とし、究竟滿足の境地に入つたものであつて、翻つて云へば自己について世界に對しても現實の差別變化を超絶した狀態態度であるから、般若佛敎では之を空無相といひ、絶待の包容性を示したものである。そこで注目すべき消息が現はれて來る。卽ち自己の生命に安立の天地を發見し、自分の中に、心の奥に滿足平和を得る時には、通常の意味に於ける我れ卽ち現實の我を超絶して居る事である。此の狀態は、美の享樂の場合にも現はれるが、宗敎の信仰には特に著しい。佛の名を唱へて居る己れは既に己れでなく、己れが佛陀慈悲の大海に沒したとか、又は七識以下の我れを通り越して第八識又は第九識の我に入つたとか、又は自分の心臟がキリストの心臟の中に融け去つたなど宗敎家のいふのは、自己の滿足が同時に自己超絶に進んで居る證據である。禪が直に見性といひ直指人心と悟つて、我が佛になつたと共に、佛が我になつたとも云ひ得る狀態に進まうとするのは、要するに自己超絶の滿足である、卽ち大宇宙を己れに收めての小宇宙の平和である。

そこで安立の狀態は如何にそれ自らの絶待の價値がありその經驗は如何に言語同斷にても、その內容には、必ず何物か自分の生命に對する解釋を具へて居る。空無相と云つても單に空虛といふ事ではない。そこで此の狀態を積極的に云ひ現はさうとすれば、神靈の大廣野とか、無量の壽命とか、無碍の光明とか、形容的ではあるが、色々に言ひ表はし得、多くの神秘家が、自分の經驗を他人に傳へる爲に色々苦心したのもこゝである。既に今までの自己を棄てゝ居る、所で又大きな世界が我れの前に、若くは己れの中に開展して、そこに我れ以上の我を發見する。而かも一方には尙ほ現實の生命は身體や感覺の上で限ある現實に支配せられ、今までの我は殘つて居る。入定の狀態では此等の束縛を全然脫して居るとは云ふが、少くとも定から出た後にはやはり、現實の少くとも殘り物、餘波がある。此の如き現實の影響と法樂の天地との對照は之を打ち消す譯には行かない。――禪家に云はすれば、それではまだ究竟地でないとして嘲笑するであらうが。――此の對照があつて、而かも滿足法悅の自己滿足を保留しやうとするから、此の安立は、現實の我が何物か絶大の庇保の下に擁せられ、光明に照らされ、慈悲に包まれて居るといふ感じになつて現はれる。――少くとも多數宗敎家の場合では。此に於て絶待歸依とか、滿幅の信賴とか、又は神人合

一とか、佛智開發とかいふ經驗が、安立態度の發表となり、歸着する所信仰の生活となる。自力とか他力とかいふ敎相分別もあるが、それは自他といふ意味次第でどちらにもなることで、信仰といへば、大膨脹を遂げた自己滿足が、大自己を目當てとし理想として之を仰ぐ態度である。神の力を如何に神話的に說くにしても、佛の慈悲を如何に形容しても、信仰すると云ふ事は、單に之を外に仰ぐのでなく、少くとも己れと氣脈相通じ、感應靈相結ぶものとして、その結合に無碍の滿足を得る事であつて、要するに自己膨脹であり、それは又同時に絕待性が自己に貫徹し泌み渡る事である。

此の如くにして內に向ひ、自己の內に安立を求め、又之を得れば、結果は自己を大宇宙に差し向け、今まで外界として居た法界に自分を發見するのであり、通常の言葉で云へば大に外に向つて發展する事になる。此に於て信仰の安立 stability security の狀態の中には大宙の消息を無視する譯に行かない事になる。向上、上求菩提、精神の巡歷 spiritual pilgrimage は、その內容方法の如何を問はず、欣求、——假令研究的探求ではなくとも——觀法乃至報謝の念又は行を要する。瑜伽三密の行が法相の分析的敎相を生み、卽身成佛の敎にも宇宙說明を伴ひ、信神渴仰にもスコラ哲學を必要とした(スコラ哲學にも神祕分子が大にあつてエックハルトもその中から生れたのである)も、

畢竟安立の態度探求――弘い意味での――の態度と全く離れる事の出來ない消息を示して居る。

談は大に神祕の雲に入つたが、その雲を出て、さて現在の人々、特に現代文明の中に生息する我々の立場に歸つて、其安立の態度を觀察して見ると、どうしても外部の刺激を脱する事は出來ない。一方は眞理の爲の眞理の研究で、天然人事に亘つてづん〳〵進歩を眞理の內殿に進めつゝある科學がある。他方には又複雜な社會生活、特に宏大な規模の科學的組織を構造しつゝある社會事業がある。我々の信仰は此等に對して盲目で居る事は出來ない。安立の態度で信仰理想の眼に見た人生世界、又その中に生息しつゝある自分を、科學の見せてくれる世界、社會に生活しつゝある自分と別の者として、離して置く譯には行かない。信仰の世界を研究の世界と別にし、一方は價値判斷の世界で、一方は眞理判斷の世界だといふ樣な工合に、自分の精神生活の中に、融通のつかない二つの Watertight compartments を作り、理智と感情とは全く別物だとするのは、要するに安立の態度が要求する自己滿足の强さを薄くすると共に研究で自己が膨脹して行く領域を自分自らで狹めてかゝるのである。安立の態度に於て大包容の生活が出來、此の如き態度で自己の生命を充實するならば、その充

實の一要素としてどうしても眞理の體得が必要である。而して眞理を探り求める研究は、前に述べた如く、外界の消息を純客觀的に探るにあるが、それは又同時に自己の中に宇宙法界を發見し、若くは宇宙の中に自己を置く事になる。探求を進めた科學の精神はこゝまで進むを要する。此の至境に、入れば、探求の態度は安立の態度と、竹膜相隔てるのみであつて、或は相幷び、或は相助け補ひ、或は又相合して自己の充實を遂げる事になる。然らば、安立信仰に探求研究を容れ得ないといふのは、それだけ、どこかに安立の不完全な點のあるのを示すに過ぎない。

且つや事實の上に於ても、純感情の安立狀態のみで滿足し、それを絕待の境地とし、研究などを一切排斥する宗教或は人でも、一時代又は多少の時間はそれのみで滿足して居るが、その滿足狀態が缺陷を生じ、動搖を來し、安立から煩悶又は探求に轉じ、而して第二の安立に進む事は、宗教史の上でも、又個人信仰の變遷でも明白の事である。此の動搖が內から自ら發する場合もあれば、又は時代の變化、科學の進步又思想界の動搖に促され、始は之に抵抗しても終に變化せざるを得ない樣になるのである。如何なる安立信仰でも、その當人には直觀の結果、又絕待の狀態と感ぜられても、その實は國民なり、宗教團體なりに傳はつた遺傳の思想や氣分がその根に橫はり、又個人精

神の發達で積み來つた蓄積がその本になつて居るのであるから、その中には今までに得た何等かの探求研究の結果が、少くとも、一部、一要素になつて居る。それ故、精神が尙一層發達して、一層弘く深い法界の消息に接し、又一般の思想潮流が變化して來れば、安立の態度も、材料と基礎とに於て動搖せざるを得ない。而して此等の變化發達は、天然なり人事なりの外界に對する何等かの研究の結果や、又社會生活思想運動の變化に促されるのであるから、安立信仰が全然探求研究を絕緣する事は出來ない。

動搖といひ變化といつても、必ずしも前の信仰が顚覆し破裂するとは限らず、今までの信仰を一層明白に又は確實にする場合にも少なからずある。日蓮上人が一難毎に法華經の信仰を確めて進んだのは、實行方面での好適例であるが、此は身證、卽ち身に當てての探求が、層一層信仰を鑄ひ上げたのである。純科學者の方面では、適例に乏しいが、進化論興隆時代の自然科學者には、―ドラモンドやワレースの如き―科學研究と共に信仰を鑄ひ上げた人もある。而して此等の場合には、安立の態度としては一貫しては居るが、今までの安立の態度を維持するのみならず、それを一層充實して、內容に一層の明確を加へて居るのであるから、そこに發達のけじめがある事は爭はれない。此の點は、一個人の發達よりも宗敎史上の發達が明白に之を示すが、今

一々の實例を擧げず、何れの宗教改革でも此の如き外部の事情、研究思索の結果が、安立に變化を與へ又發達を促したものである事は爭はれない。キリスト教の完成にギリシャ思想が有分の力であつた一事でも、此が實例として十分である。而して現今宗教思想の動搖は、一方科學の勃興と共に、他方社會生活に科學的組織が有力になつて來た結果である事も、一々の解說を要しない位明白であると思ふ。

此の如く達觀して來れば、卽ち單に其の信仰に安立してその味を味ふといふ態度でなく、安立の態度に如何の性質があるかを檢査し、此に依つて人間精神生活の生命進行を觀察すれば、安立の態度と探求の態度とは一寸見た如く相反するものでなく、植物の根と幹との如く上下相背く樣で而かも相補ひつゝあるのである。而してその作用は共に自覺生活の擴張と充實とにある。弘がりの擴張と內容の充實とは、時には相背く事もあるが、それは尙ほ一層高い發達の豫備であつて、終には相合して共に俱に精神生活を豐富にする。左の脚の進む時には、右の脚は退く樣に見えるが、次の瞬間に右の脚が進めば、左の脚は後になる。然し兩脚相合して步行が出來るのである。探求と安立とは、必しも常に融合するを要しない。互に右となり左となつて進む場合が最も多いのである。一人の人間でもその心の中で左右交互の進步もあ

るが、又歴史上の時代で互に相前後して進む場合もあり、又一社會の中で一方科學と他方宗教と左右相分れて、相刺激し又は相反撥する事もあるのである。

研究態度の結晶たる科學も、其精神の奥に入れは、自己の理性と宇宙の理法との契合を味ふ境地に進む。此が科學の範圍内での安立態度である。信仰態度の宗教にも、道を求め眞理を探り、觀念を凝らし、行を練る必要はある。此が宗教の範圍での探求態度である。この二つの範圍は、一個人の心の中にも、又人類發達の歴史に於ても、或は相背き、或は前後消長するが、精神生活の充實といふ見地から見れば、共に自分の生命と生命の舞臺とを結びつけ而して自覺を充實する役目をして居るのである。外に向つて探求しても、それは終には自分自らの内容を宇宙の事實實相に依つて闡明するに歸着して、眞理の中心燒點は己れにある。又之に反して、心を潜めて内に滿足を發見し、安立を得るにしても、結局は大宇宙を己れの中に發見して、自分の精神生活を充實するにある。外界の探求は止む事を求めないが、而かも全く當て途のない漂浪の旅路ではなく、眞理といふ北斗星と理性といふ羅針盤とを具へての探檢旅行である。内心の滿足は結着終局を求めるがその終局の安立にも、事實發達圓熟の進行はあるので、到る所に清泉を汲み草花を摘む旅路である。然らば、己れを宇宙に延

長するのと宇宙を己れに吸收するのと、方向は反對の樣であるが、大觀すれば、精神生活を充實する爲に、同し生命が或は根を張り、或は枝を延ばすのであつて、結着自分の生命と生命の舞臺たる宇宙との聯絡契合を密着せしめる作用の二方面に外ならぬのである。

尙ほ此の二つの態度と相幷んで空想創造の態度(美術に於ける如き)と制度組織の態度(社會生活に於ける如き)との異同を觀察して、互に相照明する必要があるが、今は此だけにして置く。